

いきいき茨城ゆめ国体 レポート

報告者 監督 村下 和之 (沼津西高校)



茨城国体 U16 静岡県選抜 チームスタッフ

代 表 石井 知幸 (静岡県サッカー協会 ユースダイレクター)

監 督 村下 和之 (静岡県立沼津西高校)

コ ー チ 鈴木 啓史 (静岡県立御殿場南高校)

コ ー チ 松下 幸平 (ジュビロ磐田 U18 コーチ)

GK コーチ 赤堀 勇太 (御殿場市立富士岡中学校) ※GK プロジェクトに依頼

トレーナー 松柴 圭 (エム・クラシコ)

主 務 新山 真悟 (静岡県立浜名高校)

前期リーグ、ミニ国体サポートスタッフ 湯山 隼人 (静岡県立静岡高校)

本国体サポートスタッフ 植松 弘樹 (静岡県立清流館高校) 近藤 達哉 (静岡高校)

茨城国体 U16 静岡県選抜 Team Organize

《Concept》

①静岡代表の一員としての誇りと責任

- ・全国制覇のために全力を尽くす
- ・すべては『チームの勝利』のために (For the team)
- ・自分の将来を切り拓くチャンスを掴む

②主体的に物事を考え (個人・グループ) 変化できるチーム

- ・『観て』『判断』し、『決断』して『プレー』する
- ・常に明るく強気で前向きなメンタリティ



《Style》

- ・積極的な守備から、人数をかけゴールを目指し、ボールと人が常に動き、シュート数で相手を圧倒する
- ・11人が良いポジションをとってお互いの距離を10～15mに保ち、連続・連動して効率よく攻撃・守備をする
- ・攻守の切り替えは日本一、特に攻撃から守備への切り替えの速さはチームの生命線

《Play Model》

【攻撃】

- ・中央を崩す
- ・可能な限り少ないタッチ数でボールをスピーディーに動かす
- ・縦に速くプレーする

【守備】

- ・積極的にボールを奪いにいく
- ・コンパクト（前後、左右）
- ・背後を取られない、中央破られない

【切り替え（transition）】

- ・ボールをすぐに奪い返す
- ・奪ったボールを奪われない
- ・ゾーンを変える（ボールを動かす）

《Mentality、Mind》

「誰からも応援される選手であれ」



茨城国体 U16 静岡県選抜 結果（データは別紙にて報告）

1946年に始まった国体では、単独チームとして1957年に藤枝東、58' 清水東、66' 藤枝東が優勝した。1970年、選抜大会となると、同年の埼玉との両県優勝を皮切りに、91' から94' までの4連覇を含み、選抜移行後の優勝だけでも全国を19回制覇した。

2005年のU16化に伴い様相は一変した。U16化以降しばらくの間、人口や移動の利便性など有利な条件を備えた関東圏、関西圏の選抜チームが優位に大会を支配した。

静岡県は2011年千葉県と両県優勝を果たし、2019年の今年、単独で茨城国体を制した。

しかし、東海予選での岐阜県とのゲームによる前半0-2からの逆転、1回戦での前半2-0からのPK戦など、試合運びの拙さがあった。

（過去の優勝チーム）

神奈川5回、東京3回、千葉2回、兵庫1回、静岡1回、福岡1回、沖縄1回、広島1回

（静岡県の成績）

優勝1回、4位1回、準々決勝6回、2回戦2回、1回戦3回

05年5位（岡山）、06年5位（兵庫）、07年5位（秋田）、08年1回戦（大分）、
09年5位（新潟）、10年5位（千葉）、11年優勝（山口）、12年4位（岐阜）、
13年2回戦（東京）、14年1回戦（長崎） 15年2回戦（和歌山）、16年1回戦（岩手）、
17年5位（愛媛）、18年1回戦（福井）

茨城国体 U16 静岡県選抜 活動スケジュール、メンバー選考（データは別紙にて報告）

活動日数は、36 日間で、練習会は 9 日間やらせていただくことができました。これは、例年並みだが、ラグビーワールドカップなどの影響があり、草薙球技場やエコパ人工芝を確保することができずに、練習を行うよりも各チームにお願いしてゲーム中心の活動となった。ヤングサッカーフェスティバル、甲信越静 U16 サッカー大会（山梨県）に参加させていただき、チーム強化を図ることができた。

また、エスパルスの池谷氏からお話をいただき、8 月の頭に新潟の十日町フェスティバルに参加させていただき可能性があったが諸般の事情によりお断りし、神奈川県と TG を行わせていただいた。

メンバー選考については、石井ダイレクターとコミュニケーションをとり、U15 静岡県トレセンのメンバー、GSA 参加メンバーを基本線として考えた。また、例年と異なり早生まれの選手に注目し、5 名が最終メンバー入りを果たした。12 月の段階から、各チームの監督に様子を伺ったり、ゲームを見学に行ったりした。また、1 年生の段階からゲーム出場の選手が多かったのも要因となった。足が速いなどのスペシャルな選手ではなく、いくつかのポジションができる選手を選考し、スタメンを固定せず、ローテーションで起用することでチームの運動量を分散できた。選手はサブにまわることも考慮し人間性も観察して招集した結果、福井レオナルド明はチームを支えた。

（課題）

選手の招集の調整に苦労した。プレミアリーグやプリンスリーグに出場する選手の増加や、各チームのリーグ戦の事情があり、招集する選手を確保することや出場可能時間の制限に苦慮した。さらに、県リーグが会場の確保や私立高校の土曜授業があり日曜日開催になるために、ラージグループからのメンバー招集となることがあった。東海や関東の他県は、トレセンデーの時は、リーグ戦は土曜開催に配慮されているようである。

また、鹿児島県は来年の地元開催ということもあり、県 B リーグに県選抜チームが参加し強化を図ったようである。

茨城国体 U16 静岡県選抜 活動成果

《チームマネジメント》

・スタッフの人選

代表には、石井ユースダイレクターがついてくれたことにより、和歌山国体でのコーチ経験を活かすことができた。ヘッドコーチには、私が考えるサッカーと近いサッカー観の持ち主である鈴木啓史、J ユースからは、自身が高校時代、県選抜の主将としての経験もある松下幸平、キーパーコーチは、この年代のトレセン GK コーチである赤堀勇太、主務には、東海技術委員会の事務局の経験もある新山真悟で組織。4 人とも、オープンマインドの持ち主で、積極的なコミュニケーションが取ることができた。

・役割分担の明確化

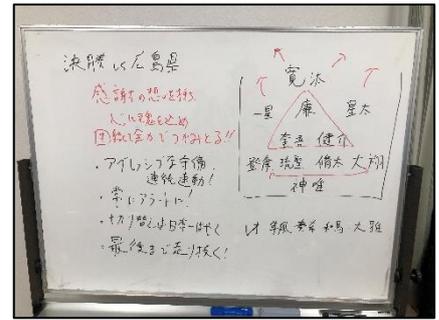
攻撃、守備、セットプレー、選手起用、ミーティング、トレーニングメニュー、ウォーミングアップ等の役割を發揮させ、コーチ、トレーナーが自分の能力を最大限發揮できるような環境づくりを意識した。試合中においても、指示が明確になることにより、効果を發揮することができた。

《選手とのチーム作り》

・チーム共通言語の作成と共有

選抜チームであり、活動日数も限られた中で、細かい戦術的な要素を落とし込むのは難しいし、各所属で行うサッカーは異なるので、チーム共通言語を作ることで、チーム作りを助けることができた。

「団結」「かたまり」「日本一の切り替え」「距離感」



・ミーティングは短く

学校の教員はどうしても説明を長くやりがちである。選手の集中力や理解力を考え、伝えたいことを整理して、そぎ落とす作業をして、ミーティングを行った。大会期間中の夜のミーティングは、自チームの振り返りを監督が 10 分、対戦相手の分析を鈴木コーチが 10 分、その他を松下コーチや赤堀 GK コーチ、松柴トレーナー、新山主務が 10 分で、絶対に 30 分を超えないことを意識した。

・選手との LINE グループでの共有

選手とできる限りコミュニケーションをとることを心掛けたが、合宿の時以外は、難しい。そこで、主務からの連絡も含めて、高校生が良く使用する LINE グループを使用。試合映像や、イメージ映像、チームの修正点や感じたことを伝える場として活用した。

《チームスタイルの維持》

・前線からの積極的な守備をやり続けなければ、このチームの存在意義はなくなる

良い守備から良い攻撃へつなげること、近年の国体を見て守備が整理できているチームが勝ちあがることから、前線の選手にアグレッシブにボールを奪いに行くことを求め、次の選手が連続、連動してついていき、インターセプトすることを意識し続けた。

・先制点をあげること

35 分ハーフ、給水タイムあり、延長なし PK という大会のレギュレーションもあり、先制点をあげることを意識することができた。膠着したゲームでも、前半終了間際など良い時間に得点を奪うことができた。また、トレーニングした中からの崩しや、サイドに侵入してからのクロスに対する走りこむ場所も意識して得点することができた。

・ローテーションと積極的な選手起用

今回の選手起用において、16 人全員を信用して起用することを意識した。また、交代についても、積極的に行うことにより、ゲームを動かすことを意識した。

・セットプレーの重要度

セットプレーの得点を目指すこと、失点をしないことを必ずゲーム前には、要求した。厳しいゲームにおける影響度を考えるとしっかりと準備することができた。ミニ国体の岐阜戦での逆転ゴール、決勝での得点はまさにその賜物であり、失点は 0 にすることができた。

《コンディショニング》

・U16年代のパフォーマンス力

U18とU16では明らかにパフォーマンスが安定しないことに違いがある。守備でもハードワークを求めするために、トレーナーが中心となり、コンディション作りは、最善の努力をした。1日に何回も行う体重測定や、食事に対する意識づけ、入浴やケアなど、他県を圧倒する部分であった。宿舎で他県の様子を見たり聞いたりしても、この部分は、静岡の強みである。

・連戦に対する準備（3回戦の壁）

ゲームスケジュールが第1試合であったために、スケジュールをルーティン化することができた。起床→散歩→朝食→ミーティング→ゲーム→入浴→ケア→昼寝→食事・補食→ミーティング→睡眠
3回戦が一番走れないことを過去の経験から予想したが準備のおかげで走り回ることができた。

まとめ

選手や指導者としての実績のない私を、茨城国体の監督として採用していただいたことにまずお礼を申し上げます。コーチングスクールの主務として活動したことから、県選抜の活動に関わらせていただきました。新潟国体の視察レポートから始まり、様々な指導者の姿を見て学ばせていただくと共に、いつか監督として県選抜を率いてみたいという野心とは言わないまでも目標として、積み重ねてきました。甲信越静大会は、3回監督（第4回長野、第8回新潟、第12回山梨）をやらせていただき、国体のコーチとして和歌山国体（鈴木伸幸監督）、福井国体（増田裕監督）と携わらせていただき、この大会を勝ち抜くためにはどのようにしていったらよいかを考えることができました。多くの監督たちが、U16に移行してからの悲願である単独優勝に向けて戦う姿を見て、また、悔しくも敗退する姿を目にし、この大会の難しさを感じました。

50年連続出場という静岡県が築いてきた歴史を、東海予選では敗退の危機にチームをしました。本大会の1回戦、前半2-0の状況から、残り3分から同点にされPK戦になるという場面にも直面しました。この苦しい経験を選手は、力に変え、試合ごとに成長する姿を全国に示してくれました。そして、メディアには、「サッカー王国 静岡の復活」という言葉がでました。しかし、静岡のサッカーを支える文化は今でもサッカー王国であると思っています。育成年代からの継続した強化や各チームの選手、指導者の情熱と協力体制、また他県では味わうことのできないほどの報道量、サッカーファンの厳しい目など。今回の優勝は、静岡のサッカーに関わる方々の想いにより達成できたと思います。

選手たちには、「チームのために100%、120%の力を捧げなさい」と呼び掛けてきました。一人でもチーム全体の中にいる自分を忘れてたり、手を抜いたりしていたら、勝てる力もないし、世界に羽ばたくこともできない。選手がこれを一つのきっかけとして、静岡から世界で闘う選手に成長していただきたいと思います。

サッカー協会の皆様、2種委員会の皆様、3種や4種の活動を支えてくれる皆様、選手やスタッフのチーム関係者の皆様、静岡サッカーを支えてくれる皆様のご支援があり、今回の活動を行うことができました。改めてお礼申し上げます。これからの静岡サッカーの発展のためにこれからも微力ながら尽力していきたいと思っています。ありがとうございました。

静岡サッカー100周年、おめでとうございます。